

宮城県慶長使節船ミュージアム改修基本計画 概要

I. 基本計画策定に当たって

◆改修基本計画の基本理念

サン・ファン・パウティスタ号を取り巻く歴史と、牡鹿半島の風土・自然の魅力を引き出し、地域に愛されるサン・ファン館への再生

◆改修基本計画の基本方針

<p>1. 慶長遣欧使節の歴史を軸にした世界とのつながりの紹介 ・慶長遣欧使節に関する資料の収集・保管・展示を行う施設とする。</p>	<p>2. 大航海時代の帆船・海洋文化、造船技術の伝承 ・大航海時代の日本と世界の帆船・海洋文化、造船技術を体験できる施設とする。 ・20世紀最後で最大の木造船を建造した意義を継承する施設とする。 ・帆船・海洋文化の普及活動を行う施設とする。</p>	<p>3. 豊かな風土や地域資源の活用 ・牡鹿半島や太平洋、夕日等、美しい景観が望める施設とする。 ・牡鹿半島・金華山等への玄関口として周遊を促す施設とする。 ・漫画や食などが楽しめる石巻地域の観光スポットと連携した施設とする。</p>	<p>4. 東日本大震災の記録の継承 ・慶長使節船ミュージアムにおける東日本大震災による被災状況と復興の記録を後世に伝える施設とする。</p>
---	---	--	---

◆個別の施策・取組

	誘客	展示リニューアル	後継船*整備	復元船解体・再利用
個別方針	サン・ファン館の魅力を地元へアピールし、拡散・循環を通して、国内外への「偉業の伝承」の発信につなげる	後継船を主軸に復元船の部材展示やデジタルコンテンツ等の活用で復元船の迫力を補完しつつ、地域の自然・風土を活用した体験型展示等を通して歴史、帆船・海洋文化、造船技術を継承する	展示の主軸とし、約400年前の大航海時代の帆船・海洋文化と、26年前に船大工が蘇らせた造船技術のシンボルとする	26年前に船大工が蘇らせた復元船の原寸の規模感や迫力、質感を補完しつつ、復元船部材の再生を通して思いを巡らす端緒とする
対応策取組	<p>対応策①：周辺施設と連携した誘客や魅力の発信 ・県内外の類似施設や近隣の観光地と連携し、相互に送客を行う仕組みづくり ・石巻市内や県内他地域の観光スポットと連携し、国内外に魅力を伝える情報発信施策等</p> <p>対応策②：おもてなしやサービスの充実による魅力の向上 ・リニューアルに合わせた、更なる誘客につながる来館者サービス ・慶長使節船ミュージアムにおけるサービス面を改善し、来館者がまた来たいと思う、リピートにつながるおもてなし等</p> <p>対応策③：ターゲット別の誘客対応策の実施 ・来館者の中心となる「国内交流客」、「外国人観光客」、「地域利用者」の3つのターゲット設定と、それぞれに対応する誘客策 ・各ターゲットに対する分断的な対応ではない、統合的に対応可能な誘客策等</p>	<p>対応策①：地域の自然の魅力の発信 ・牡鹿半島から見た大海原など、自然の魅力を最大限活用した展示 ・復元船に利用した木材のある樹林、周辺の地形の紹介等</p> <p>対応策②：これまでの歩みや研究成果を伝える展示 ・復元船の部材の部分展示等により、復元船の規模を表現 ・サン・ファン・パウティスタ号を復元した意義や、建造した船大工の紹介 ・リニューアルまでの慶長使節船ミュージアムの歩みの紹介等</p> <p>対応策③：慶長遣欧使節と地域の歴史を学ぶことのできる展示 ・最新のデジタルコンテンツ等を活用した「慶長遣欧使節」、「伊達政宗・支倉常長」などの人物や歴史背景、大航海の様子の紹介 ・「帆船・海洋文化、造船技術」等を楽しく学ぶことのできる体験型展示 ・東日本大震災を乗り越えた記録、マスト修復時の世界との交流、復元船解体等の紹介等</p>	<p>対応策①：約400年前のサン・ファン・パウティスタ号の姿の伝承 ・帆の張り方やマスト・船体の構造などガレオン船独自の意匠を表現 ・周辺展示と併せて、船の仕組みや船内の様子など、帆船特有の文化を紹介 ・当時の乗組員の様子等が分かるような表現等</p> <p>対応策②：26年前の慶長遣欧使節船復元の意義の伝承 ・史実に忠実に復元された復元船の意匠を可能な限り再現 ・造船技術展示及び復元船の部材展示の中心としての活用等</p> <p>対応策③：新たな価値の追加 ・漫画やアート等、石巻の魅力となっているコンテンツとの連携 ・造船過程の体験等</p> <p>※後継船は縮尺4分の1・FRPで整備することを今後の整備方針で決定している。</p>	<p>対応策①：約400年前のサン・ファン・パウティスタ号の魅力の継承 ・原寸の大きさを体感 ・当時の船室や使われ方等の紹介（船内部の高さ、ベッドの小ささ、かまど等）等</p> <p>対応策②：26年前の慶長遣欧使節船復元船の魅力の継承 ・木材を扱った曲げや削り等、船大工の技術を解説 ・伝統技法等、石巻の産業として紹介 ・26年間展示され続けてきた復元船の木の素材を紹介 ・県民と協力して復元した歴史の継承等</p>

◆今後想定される課題及び対応

ミュージアムの中心的展示物である復元船の解体後に課題となる「原寸大の迫力や規模感の補完」及び「解体後の部材の再利用」への対応として次の内容を整理した。

取組1：中央部肋骨など27の部位展示候補を中心に、復元船部材の再利用や部位の新規制作により原寸大が持つ迫力が伝わるような部位展示

※実施に当たっては解体手順・工法、復元船の状況などの諸条件を整理の上、可能な限り実現できるよう検討を進める。

取組2：復元船のデジタルアーカイブデータ（座標・色彩など）を活用したデジタルコンテンツの制作

取組3：展示物として活用できなかった復元船部材を、記念品やグッズ製作の材料として再利用

II. 展示計画及び施設改修計画等

◆基本的考え方

○「観光」への対応

慶長遣使節ミュージアムを目的地として選んでもらうための強いテーマ性を発信することが必要と捉えた上で、旧仙台藩・宮城県における牡鹿半島という地域の個性を明らかにするとともに半島全域や石巻地域等への広域的な観光のストーリー性を視野に入れた展示構成を図る。

○「教育」への対応

修学旅行や社会科見学などの学校団体利用や、家族や仲間での成長に応じて気軽に訪れることができ、多様な学びの機会を提供できる展示構成を図る。

◆展示コンセプト

- ① 県域全体の観光体験ストーリーに沿う仙台藩との関わりを強化した展示
慶長遣使節への理解や楽しみ方を増幅できる伊達政宗公の藩政との関わりや、当時の石巻地方の変遷などを加え、県域全体を巡る観光体験の一翼を担う。
- ② 東日本大震災からの復興を語る展示
リニューアルの要因の一つとなった東日本大震災と、そこからの復旧・復興の過程も展示対象として重視。被災内容や復旧に向けたカナダからの木材提供など、震災後の取組を紹介する。
- ③ 牡鹿半島の入口部にある立地特性を活かした展示
牡鹿半島への動線上の出入口に位置する特性を活用し、鮎川・雄勝地区、女川町等の観光拠点や半島全体の観光アクティビティに人々をつなぐ展示を行う。
- ④ 帆船・海洋文化、造船技術を扱う展示
サン・ファン・パウティスタ号の木造帆船という特徴を活用した帆船・海洋文化、造船技術に関する体験型展示を重視する。

◆展示シナリオ

- ポイント1 牡鹿半島の風土の特質紹介で来館者を迎える**
「牡鹿半島の風土」を展示の核の一つに明確に位置付け、入退館時に全ての人が接することができるエントランス部に配置する。
- ポイント2 類いまれなビュースポットを整備・開放して名所化する**
誘客性を高める工夫の一つとして、「ここだけ」で体験できる事柄を鮮明化するため、太平洋を見渡すことができ、壮大で美しい夕陽を展望できる空間を設ける。
- ポイント3 慶長遣使節を仙台藩や世界情勢と絡めて解き明かす**
慶長遣使節の偉業を深く分かりやすく理解できる工夫を取り入れ、伊達政宗公による仙台藩政での位置付けや大航海時代にあった世界情勢の視点を加味した展示とする。
- ポイント4 東日本大震災を契機とした新しい航海の物語を紹介する**
東日本大震災以降の館内の状況及び震災からの復旧・復興の状況を新たな展示構成に盛り込む。
- ポイント5 後継船をシンボルとした帆船・海洋文化体験エリアを創出する**
サン・ファン・パウティスタ号及び後継船を基軸に、世界の帆船をはじめとする帆船・海洋文化を体感できる展示とする。

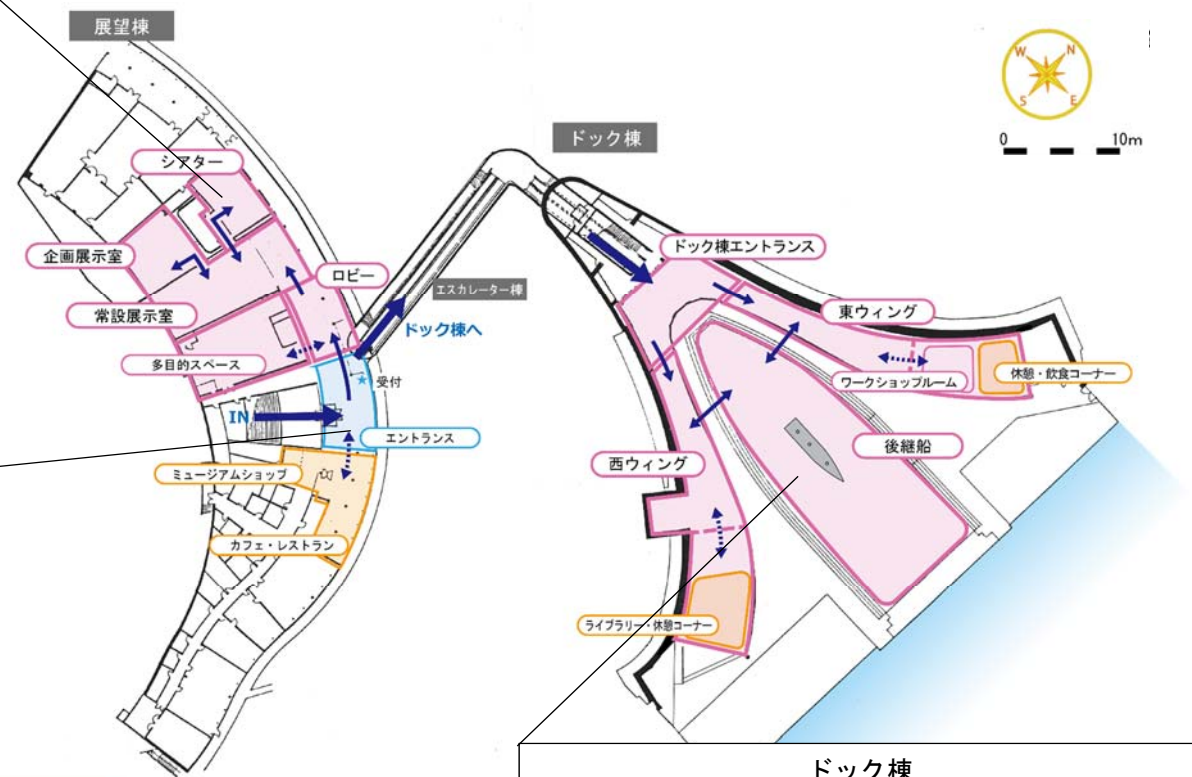
◆配置・動線

常設展示室／シアター

- 伊達政宗公の壮大な思いと大航海時代の世界への夢
17世紀初頭の仙台藩、大航海時代の世界の状況を伝える
- 慶長遣使節船の建造
材木や造船技術などを牡鹿の自然特性と絡めて解説する
- サン・ファン・パウティスタ号の航海
3か月に及ぶ航海の軌跡をたどる
帆船文化をテーマとする特徴的体験を提供する
- 支倉常長ら慶長遣使節の旅路
出帆してから7年に及ぶ慶長遣使節の足跡をたどる
- 復元船建造の道
復元船建造の物語と建造に寄せられた思いを紹介する
- 東日本大震災
館の被災状況とその後の復旧・復興過程を紹介する

エントランス／ロビー

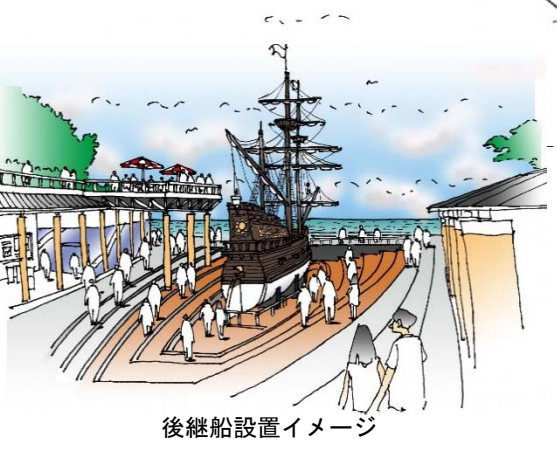
- 導入部
来館者属性に応じた館内誘導サービスを行う
近隣地域、観光スポットの紹介・案内を行う
- 仙台藩から根付く牡鹿半島を通じた宮城の歴史・風土
牡鹿半島及び石巻・女川地域の歴史・風土を色濃く反映した観光体験アクティビティなどを紹介する



ドック棟

- 導入部
ドック棟の紹介及びラウンジ空間として活用する
- 帆船・海洋文化
体験的な形で操船術等に触れ、技術的な面から帆船を探る
- 木造船文化・牡鹿の自然
造船に関わる展示等を行う
- 後継船
ドック棟中心部に展示する
展望デッキを設置、全方位から船体を見られるようにする
- 復元船の部材
復元船の部材の一部を保存活用し、展示する。

上記のほか、原寸大の迫力を補う展示としてデジタルコンテンツを活用する。



◆スケジュール・概算費用

事業のスケジュール

	令和元年度 (2019)	令和2年度 (2020)	令和3年度 (2021)	令和4年度 (2022)	令和5年度 (2023)	令和6年度 (2024)
基幹事業	全体基本計画	全体基本設計	全体実施設計	工事		
解体関係		解体設計	解体工事 修復・保存			供用開始
土木			土木実施設計	土木工事		
建築・展示		建築展示基本設計	建築展示実施設計	建築・展示工事 1/4後継船制作		

事業の概算費用

単位：千円

項目	金額
後継船（4分の1）	448,000
現船解体	145,000
ドック改修費	199,000 ～ 297,000
ミュージアム整備費（展望棟）	415,000 ～ 450,000
ミュージアム整備費（ドック棟）	387,000 ～ 528,000
その他（散策路整備ほか）	0 ～ 80,000
合計	1,594,000 ～ 1,948,000